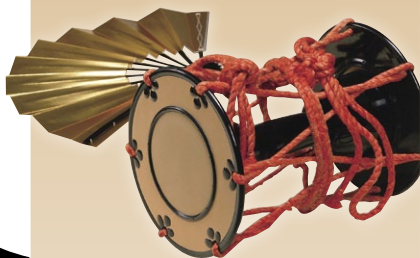


金沢



彩り豊かな文化のまち



❀ なぜ江戸時代からの文化が残ったのか

武士の時代が終焉を迎えた後、藩主であった前田家やその家臣の多くは金沢を去りました。しかし、江戸時代の文化は、今も金沢に息づいています。それは一体なぜなのでしょう。

江戸時代、城下町金沢では、藩主の意向により、能や茶の湯などの文化は武士だけではなく、商人や職人など町人にも奨励され、深く浸透しました。武家の文化は、精神修養と結びついたものであり、高い美意識、精神的な豊かさを重視する精神が、城下で暮らす人々の暮らしに影響を与えました。武士がまちを去った後も、有力な商人をはじめとするまちの人々が、その文化を受け継ぎ、現在に至っています。



❀ 能楽と茶の湯

能楽と茶の湯は、武家が支援者となり大成した日本独自の伝統文化です。武士の時代、能楽と茶の湯は武士のたしなみとされていました。そのどちらもが、禅宗の影響を強く受けており、無駄を排除し、最小限の動きやしつらえで心を伝える芸術です。金沢には、今も能楽と茶の湯の文化が人々の生活のなかに息づいています。



文化のまちのはじまり

金沢のまちは、16世紀なかばに仏教の一派「浄土真宗」が布教の拠点として寺院を置いたことにはじまります。金沢は、信仰に厚い人々のまちとしてはじまりました。その後、今から約400年前に戦国武将が寺院の跡に城を造り、以来、金沢は武士が支配する城下町として発達します。

江戸時代、金沢に城を構え、加賀地方を支配した加賀藩前田家は、日本全国を統べる徳川家に次ぐ財力を持っていました。また、徳川家が全国統一を成し遂げる以前、前田家は、徳川家に敵対する勢力に与していました。そのため、前田家は、謀反を起こすのではないかと常に徳川から警戒されていました。その警戒の目を逸らすため、前田家は、その財力を軍事ではなく、文化や工芸といった文化政策に注ぎました。京都や江戸から各分野の優れた学者や文人、茶人、工人を招き、当時の一流の文化を金沢に根付かせました。その結果、京都の公家文化と江戸の武家文化、その双方の影響をうけた独自の文化が誕生しました。

能楽の歴史

8世紀頃から庶民の間で親しまれてきた歌舞音曲や、神へ捧げる舞などの要素が混ざり合い、また、「禪」の影響を受け、14世紀頃に現在の「能」の原型が形作られたと言われています。その後、能楽は、有力な武士や貴族に保護され、洗練されていきました。17世紀(江戸時代)、将軍が様々な儀式を盛り上げるために能楽を催したことから、能楽は最盛期を迎え、能楽は武士の嗜みとされました。現代に伝わる五流派(観世、金春、宝生、金剛、喜多)が勢揃いしたのは江戸時代のことです。

金沢の能楽

16世紀終わりに金沢を中心とする加賀地方の領主となった初代藩主前田利家は、当時の権力者の影響で自らも能や狂言を演じ、その息子も、大野湊神社の神事能(神社の祭礼に能楽を奉納すること)を再興しました。この神事能は、今日まで継承されています。

江戸時代、日本を治める将軍家が能楽を奨励したことから、加賀藩主も能楽の保護、育成を図ります。藩主は、専業の役者を雇ったほか、商人を町役者として兼業させたり、工芸職人工房(御細工所)の職人に役者との兼芸をさせ、藩内の色々な儀式で能楽を披露させました。また、藩主自らも能を演じることを楽しみました。その結果、加賀藩では、武士だけでなく商人などの町人の間でも、能や狂言を演じること、能の文句を謡うことが流行しました。江戸時代、能の流派はいくつかありましたが、加賀藩では、藩主が能楽の一流派「宝生流」を愛好したことから藩内で「宝生流」が広がりました。江戸時代が終焉を迎え、加賀藩主やその家臣である武士の多くが金沢を去り、「加賀宝生」として知られた金沢の能楽は、一時衰退します。

しかし、金沢の商人 佐野吉之助が、加賀藩お抱えの能役者に学び、加賀宝生の伝統を継承、私財を投じ、能楽堂を建設、装束や能面の収集を行うなど、尽力した結果、加賀宝生は、再び市民の間に広がり、現在も月に1回定例能が行われています。

❖**能の曲目** 現代に伝わる曲(演目)は、240余りで、5つのジャンルに分けられます。

❖**登場人物** 「シテ」とよばれる主役、「ワキ」とよばれるシテの相手方、「ツレ」とよばれる助演役がいます。その他、歌を担当する「地謡(じうたい)」、楽器を担当する「囃子方(はやしかた)」などが登場します。

❖**面** 面(おもて)とも呼ばれる能面は、基本型が60種類ほど細分化すると200以上の種類があると言われています。能面は、役の性別や年齢、社会的地位を表し、能面をつけることにより、青年や老人、女性、そして人間ではないもの(神霊や鬼、動物など)を演じます。

能楽

能楽は、日本独自の舞台芸術です。様式化された歌舞劇「能」と、せりふによる喜劇「狂言」で構成されています。能楽の特徴は、そのシンプルさにあり、簡素化された空間において、様式化された動きと舞、歌と楽器により物語を表現します。ユネスコの世界無形文化遺産に日本第1号として認められた、日本が誇る伝統文化のひとつです。



茶の湯の歴史

茶は、9世紀に中国から日本へ伝わったのが始まりとされています。13世紀、僧 栄西により、中国から禅と共に日本で廃れていた茶を飲む習慣が伝えられ、15世紀には、身分の高い人たちの間で、中国から輸入された茶器(唐物)を用いた茶会が開かれるようになります。茶と禅が日本に定着すると、禅の教えを反映し、精神性を重んじた日本独自の茶の湯が生まれました。16世紀、日本は武士による戦乱の時代。心を落ち着かせる茶の湯は、武士の心の慰みとなるとともに、茶の湯に用いる唐物を褒美として与えるなど、権威の象徴として用いました。その後の武士の時代においても、精神修養として茶の湯は武士の嗜みとされました。

金沢の茶の湯

金沢を中心とする加賀地方の領主(加賀藩主)前田家では、歴代の藩主が茶の湯に深い関心を寄せました。初代藩主前田利家とその息子は、茶の湯を大成した千利休から直接手ほどきを受けています。3代藩主以降も小堀遠州など茶の湯の代表的な茶人に師事し、茶の湯を広く奨励したことから、家臣である武士はもとより、金沢の商人や職人まで茶の湯に親しむようになり、金沢の身分の高い武士や商人の自宅には、茶室と露地(茶室に付随する庭園)が作られました。武士の時代が終焉を迎えた後も、金沢の商人は茶の湯を愛好し、その文化を受け継ぎました。現在も、多くの人が様々な流派で茶の湯を嗜み、そのもてなしの心は、くらしの中に溶け込んでいます。

- ❖ 緑茶 日本でもっとも飲まれているお茶で、煎茶、ほうじ茶、抹茶などがあります。抹茶は、蒸して乾燥させた茶葉を石臼で粉末にしたものです。
- ❖ 抹茶 茶の湯の抹茶には、「薄茶(うすちゃ)」と「濃茶(こいちゃ)」の二通りあります。薄茶は一人ずつ別々の茶碗に点てますが、濃茶は複数人数分を点て、ひとつの茶碗で回しのみをします。「茶事(ちゃじ)」と呼ばれるお茶会は、客を招き、懐石料理を食べ、濃茶と薄茶でもてなすことを言いますが、最近では、薄茶だけのお茶会も多く開かれています。
- ❖ 亭主 客を迎えるホスト役を「亭主」と呼びます。亭主は、客をもてなすため、季節や茶会の目的に合わせ、茶室の中に飾る掛け軸や花を選び、料理や菓子を考え、茶道具を揃えます。茶の湯は、広い知識と高い美意識が求められる総合芸術です。



茶の湯

「ちゃどう」「さどう」とも呼ばれます。呼び方は茶の湯の流派によって異なります。

茶の湯は、一服のお茶を通して「和敬清寂^{わ けい せい じやく}（主人と客がお互いの心を和らげて敬いあい、茶道具や茶会の雰囲気^{ふんぎ}を清浄にすること）」の教えを心に刻み、自らの心を高めていく、日本の文化を象徴するもののひとつです。美術工芸、料理や建築などの日本の文化は、茶の湯の影響を大きく受けています。





かなざわすばやし 金沢素囃子

囃子は、小鼓、太鼓、笛など和楽器で演奏する音楽やその演奏者のことを指します。囃子には、歌舞伎囃子、能囃子、祭囃子などがありますが、金沢素囃子は、歌舞伎囃子から派生したものです。小鼓、大鼓、太鼓、笛による演奏に、三味線が加わり、現在の形になりました。

江戸時代から明治時代の金沢では、歌舞伎が庶民の人気を博し、芝居小屋（歌舞伎を行うための劇場）で盛んに上演され、優れた役者も多く現れました。金沢に住む歌舞伎役者が、芸妓げいこに対して、踊りを指導することも多かったことが、芸妓が担い手の中心である金沢素囃子が歌舞伎囃子の流れを汲む所以のひとつとされています。芸妓は、唄や踊り、三味線などの芸で宴席を盛り上げることを仕事にする女性のことです。

金沢には、現在、三つの茶屋街（芸妓を抱えて、料亭などへ芸妓の斡旋をする店「茶屋」が集まった地域）があり、芸妓たちがレベルの高い伝統芸能の数々を受け継いでいます。金沢の芸妓が持つ技芸の中でも、素囃子の格調の高さや優美さ、技能は全国トップクラスとされています。

金沢の工芸

江戸時代、前田家が行った文化施策のうち、とりわけ現在の金沢に影響を与えているのが工芸の振興です。江戸時代、幕府や各藩は、「御細工所」という工房で武具の修理や室内調度品の制作を行わせました。加賀藩の御細工所は、幕府や他藩に比べ規模が大きく、職人に能楽との兼芸を求めたところに特徴があります。加賀藩では、優れた技能を持つ技術者や職人を町人からも登用、高い身分と生活を保障し、作品制作に取り組みせました。また、京都や江戸から名工を招き、作品制作と職人(御細工人)の指導にあたらせたことで、優れた技術が育ち、蒔絵、漆工芸、象嵌など様々な工芸品が生み出されました。藩主が、御細工人の技術の参考にするため収集した、日本各地の工芸技術資料「百工比照(百工は様々な工芸、比照とは比較対照するという意味)」も、金沢の工芸に大きな影響を与えました。

また、加賀藩の御細工人は、仕事とは別に能の稽古を奨励されていました。彼らは、藩主の演能の補助や稽古の相手を務めるため、主役であるシテではなく、地謡や囃子方などの稽古に励むことを求められました。



所蔵：金沢市立中村記念美術館



所蔵：卯辰山工芸工房

金沢の豊かな文化にふれる

石川県立能楽堂



毎月(4,8月除く)第1日曜日には、定例能が行われます。公演のない日は、総檜造りの本舞台を無料で見学できます。

- 住所/金沢市石引4-18-3
- 電話/076-264-2598
- 開館時間/9:00~22:00(見学は17:00まで)
- 休館日/月曜日、年末年始、祝日

金沢能楽美術館



能面や能装束など能楽に関する展示を行っています。予約なしで能面や能装束の着装体験ができます。

- 住所/金沢市広坂1-2-25
- 電話/076-220-2790
- 開館時間/10:00~18:00(入館は17:30まで)
- 入館料/一般300円、65歳以上200円、高校生以下無料
- 休館日/月曜日、年末年始、展示替期間

石川県立美術館



国宝「色絵雉香炉」など石川県ゆかりの古美術品から現代作品まで美術工芸の名品を幅広く展示しています。

- 住所/金沢市出羽町2-1
- 電話/076-231-7580
- 開館時間/9:30~18:00(入館は17:30まで)
- 入館料/一般360円、大学生290円、高校生以下無料、企画展は別料金
- 休館日/年末年始、展示替期間

金沢市立中村記念美術館



金沢の茶道文化と伝統工芸を紹介する美術館。館内で抹茶と菓子を味わうことができます。

- 住所/金沢市本多町3-2-29
- 電話/076-221-0751
- 開館時間/9:30~17:00(入館は16:30まで)
- 入館料/一般300円、65歳以上200円、高校生以下無料
- 茶菓券/200円、300円
- 休館日/年末年始、展示替期間

金沢卯辰山工芸工房



工芸作品や資料の展示のほか、技術研修者の創作活動を見学することができます。

- 住所/金沢市卯辰町10
- 電話/076-251-7286
- 開館時間/9:00~17:00(入館は16:30まで)
- 入館料/一般300円、65歳以上200円、高校生以下無料
- 休館日/火曜日、年末年始、展示替期間

金沢市立安江金箔工芸館



金箔ができるまでの工程や、金箔を用いた美術工芸品の展示を行っています。

- 住所/金沢市東山1-3-10
- 電話/076-251-8950
- 開館時間/9:30~17:00(入館は16:30まで)
- 入館料/一般300円、65歳以上200円、高校生以下無料
- 休館日/年末年始、展示替期間



新しい文化

加賀藩前田家が育んだ文化は、400年以上にわたる長い時間をかけ、金沢に暮らす人々の営みのなかに溶けこんでいきました。その豊かな文化的生活は、新しい時代の文化を取り込みながら、金沢に今も息づいています。

若き工芸家の養成機関「金沢卯辰山工芸工房」、市民のアートや演劇、音楽活動の拠点「金沢市民芸術村」などにより、伝統文化を受け継ぎつつ新しい文化も生み出す環境のなか、新旧の文化が共存しています。

新しい金沢の文化を象徴しているのが、金沢21世紀美術館です。建築美で世界的に注目を集めるこの現代美術館の存在により、金沢の人々は、日常の中で、まちに受け継がれた日本の伝統美に加え、最先端の美に触れることができるようになりました。



❖金沢市民芸術村



紡績工場として使用された赤レンガの建物を市民の演劇・音楽・美術活動等の練習の場として再生した施設です。

- 住所/金沢市大和町1-1
- 電話/076-265-8300
- 利用時間/全日24時間(年中無休)

❖金沢21世紀美術館



現代美術を収蔵した美術館。館内は有料の展覧会ゾーンと無料の交流ゾーンに分かれています。

- 住所/金沢市広坂1-2-1
- 電話/076-220-2800
- 開館時間/展覧会ゾーン:10:00~18:00
(金・土曜は20:00まで)
交流ゾーン:9:00~22:00
- 観覧料/有料(展覧会により異なる)
- 休館日/展覧会ゾーン:月曜日、年末年始
交流ゾーン:年末年始



【編集・発行】金沢市文化政策課

〒920-8577 金沢市広坂1丁目1番1号
TEL.076-220-2442 FAX.076-220-2069